

# 開発教育を取り入れた英語教育

藤本 幸伸・小川 弘敏\*<sup>1</sup>

Development Education in English Classes

FUJIMOTO Yukinobu, OGAWA Hirotohi\*<sup>1</sup>

(Received January 5, 2017)

キーワード：開発教育、国際理解、英語教育

## はじめに

この実践研究は、山口大学で開催された第23回山口大学英語教育研究会（2016年11月26日）で小川が発表した研究発表「開発教育を取り入れた英語教育」に、高校英語教科書の編集経験を持つ藤本が現行『コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ』から開発教育と関連する題材について補足を書き加えたものである。研究発表の内容に関して、生徒の英文例の追加など若干の加筆補正をお願いしたが、本研究のアイデアと計画、授業実践、振り返り、そして授業計画の修正等の本論部分（セクション2以降）は、小川に依るものである。また、注釈に挙げた生徒の英作文例に付したコメントは藤本による。

## 1. 『コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ』の中の開発教育

高等学校英語教科書を使って開発教育を取り入れようとする場合、そもそも英語教科書に国際理解や異文化理解に関連する文章が収録されていなければならない。東京都教育委員会が公開している『平成28年度使用都立高等学校（都立中等教育学校の後期課程及び都立特別支援学校の高等部を含む。）用教科書の採択結果について』（2015）から、現在使われている英語教科書に開発教育に関連する文章がどの割合で収録されているのかを確認しておく。確かに、山口県と東京都、また東京都と全国、さらには国公立と私学とでは、英語教科書の採択状況に差があるのは事実である。例えば、東京都の公立高等学校の「コミュニケーション英語Ⅰ」では、三省堂の採択率が一番高く、その中でも*VISTA English Communication*が過半数を占めている。だが、全国の私学を含めた高等学校英語教科書のなかで最も採用部数が多いのは、東京書籍の*All Aboard! Communication English*で、次いで三省堂の*VISTA English Communication*と*CROWN English Communication*がほぼ同数で続く（この教科書採択情報は非公開資料による）。全国の英語教科書採択率から、最難度と言われる三省堂*CROWN*を私学の方が多く利用し、収録された題材の差が授業内容に影響を与える可能性があると思える。とは言え、東京都の英語教科書採択状況と全国の採択状況に、若干の例外を除けば、大きな差があるわけではないので、ここでは東京都の採択状況を参考にして、英語教科書に国際理解や異文化理解に関する文章がどれくらいの割合で収録されているかを見ておくことにする。

次ページの表1は、平成28年度東京都が採択した英語教科書で、大半の高等学校が採用する「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ」について、採択率の高い上位6社と、そして各社の発行する英語教科書で最も採択された教科書を集計にしたものである。各教科書から、国際理解や異文化理解に関連する文章がどれくらい採用されているかを確認しておこう。

---

\*1 山口県立大津緑洋高等学校

表1 上位6社の「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ」教科書

コミュニケーション英語Ⅰ

出版社	採用率	採用学校数	教科書名	採用学校数	社内比率
三省堂	25.8	71	CROWN English Communication I	10	14
			My Way English Communication I	14	19.7
			<b>VISTA English Communication I</b>	<b>47</b>	<b>66</b>
東書	18.5	51	<b>All Aboard! Communication English I</b>	<b>28</b>	<b>55</b>
			Power On Communication English I	18	35.3
			PROMINENCE Communication English I	5	1
数研	12	33	POLESTAR English Communication I	3	1
			BIG DIPPER English Communication I	8	24.2
			<b>Comet English Communication I</b>	<b>22</b>	<b>66.7</b>
啓林館	10.2	28	<b>ELEMENT English Communication I</b>	<b>17</b>	<b>60.7</b>
			LANDMARK English Communication I	11	39.3
文英堂	8	22	UNICORN English Communication I	7	31.8
			<b>Grove English Communication I</b>	<b>15</b>	<b>68.2</b>
第一	6.2	17	Perspective English Communication I	5	29.4
			<b>VIVID English Communication I</b>	<b>12</b>	<b>70.6</b>

コミュニケーション英語Ⅱ

出版社	採用率	採用学校数	教科書名	採用学校数	社内比率
三省堂	24.3	68	CROWN English Communication II	23	33.8
			My Way English Communication II	18	26.5
			<b>VISTA English Communication II</b>	<b>27</b>	<b>39.7</b>
東書	13.6	38	<b>All Aboard! Communication English II</b>	<b>21</b>	<b>55.3</b>
			Power On Communication English II	10	26.3
			PROMINENCE Communication English II	7	18.4
数研	12.9	36	POLESTAR English Communication II	4	11
			BIG DIPPER English Communication II	13	36
			<b>Comet English Communication II</b>	<b>19</b>	<b>52.8</b>
啓林館	10	28	<b>ELEMENT English Communication II</b>	<b>14</b>	<b>50</b>
			LANDMARK English Communication II	14	50
文英堂	12.5	35	UNICORN English Communication II	15	42.9
			<b>Grove English Communication II</b>	<b>20</b>	<b>57.1</b>
第一	7.9	22	Perspective English Communication II	9	40.9
			<b>VIVID English Communication II</b>	<b>13</b>	<b>59.1</b>

表1の内、ゴシック体にした教科書が、現在多くの高等学校で使用されている代表的英語教科書と言える。この6つの教科書に国際理解や異文化理解など開発教育に繋げることが可能な題材はどのくらい収録されているのだろうか。各教科書には、10のレッスンと二つのREADINGから構成される平均して12課分の題材が収録されている。その中で、VISTAⅠ・Ⅱはそれぞれ二つ、All Aboard!Ⅰ・Ⅱは三つと二つ、CometⅠ・Ⅱはそれぞれ一つ、ELEMENTⅠ・Ⅱはそれぞれ三つ、GroveⅠ・Ⅱは三つと四つ、VIVIDⅠ・Ⅱは二つと一つの割合で国際理解や異文化理解の題材が収録されている。収録題材の比率としては、国際理解・異文化理解をテーマとする題材は決して多いとは言えず、むしろ、和食、漫画、浮世絵、高校生の海外活動など日本文化をテーマとした題材の方が多い傾向にある。

もちろん、どういった題材を国際理解・異文化理解の題材と見なすかは評者によって異なる。「文化題

材」という項目を立てて英語教科書の題材を分析する大川光基（2016）は、「文化題材」を「（a）日常生活（挨拶、自己紹介など）、（b）学校生活（授業、友人との会話など）、（c）風俗習慣（食生活、生活習慣、年間行事、伝統的なもの）、（d）地理・歴史、（e）言語・コミュニケーション、（f）若者文化（アニメ、漫画など）、（g）環境、（h）戦争、（i）人権（生き方、障害者など）、（j）物語（昔話、小説など）、（k）自然科学」（5）と定義して、非常に多岐に亘る項目を含めており、当然、小川が授業実践に選んだ題材とは異なる。だが、英語教科書の収録題材の傾向を知ることができるので、「文化題材」の比率を見ておこう。

大川は12社12冊の「コミュニケーション英語Ⅰ」教科書を数量分析し、各レッスンに「文化題材」を表す表現を計算（一つのレッスンに複数個現れれば、複数個と計算）して、英語教科書の傾向を明らかにする。「文化題材」に関して、英語が「母国語」と見なされているか公用語か、あるいは外国語かによって「文化題材」の地域を分けると、全レッスン数に対してA（英語を「母国語」とする地域：アメリカ、イギリス、オーストラリアなど）は49%、B（公用語とする地域：インド、シンガポールなど）は13%、C（外国語とする地域：日本、韓国、中国、タイなど）33%と、圧倒的に英語を「母国語」とする地域に「文化題材」が偏っていることを指摘している。因みに、日本を「文化題材」とする比率が55%と最も多く、現行学習指導要領の意向を正確に反映している。また、「文化題材」の意図とねらいを「他文化理解・自文化理解・グローバル理解・比較対照」に分けて分析し、全体に対して「他文化理解」は36%、「グローバル理解」は31%、「自文化理解」は28%、「比較対照」は5%と算出している。以上のような傾向に関して、大川が「日本にはない外国の文化を知ることが高校生には興味深く思われるが、単に表面的な情報の説明で終わるのではなく、関連する題材を効果的に取り入れて比較したり、その題材について話し合わせるなどして、より生徒の文化理解を深め、人間的にも成長させることが大切であろう」（7）と指摘しているように、確かに現行英語教科書には小川が取り上げる開発教育の題材は比較的少ないのではあるが、高校生の「文化理解を深め、人間的にも成長させる」授業の試みは重要であり意義あるものと言えるだろう。

## 2. 開発教育とは

最近の日本の英語熱の加熱ぶりには目覚ましいものがある。2019年ラグビーワールドカップの日本での開催、2020年の東京でのオリンピック開催の決定などにより更に英語熱に拍車がかかっているのだろう。英語を学ぶということは英語を話せるようになるということだけではない。学習指導要領にもあるように、外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めることが必要となってくる。「文化・海外」という言葉から欧米などの先進国を想像することが多く、また先進国の情報を入手することは難しくはないであろう。では発展途上国と呼ばれる国についてはどうであろう。近年、英語教科書には国際理解教育の推進やアジアやアフリカを題材にした文章が多くないとは言え、発展途上国の名前を耳にする高校生も多いであろう。しかしながら生徒には馴染みが薄く、内容に対する理解が不十分なままであったり、生徒が自分自身のことと捉えることができなかつたりと課題が多い。そこで、開発途上国を身近に感じることができる参加型の手法を英語の授業に取り入れた。

参加型の手法では、実際に体験して、身をもって理解することができる。個人で考え、グループや全体でそれらを共有することで議論が活発になり、生徒自身受け身ではなく、活動に参加していると実感できる。そして、教師が知識を教え込むのではなく、生徒が自ら気づくということが、この参加型学習の利点である。

2016年8月にJICA教師海外研修に参加しラオス人民民主共和国で感じたことを基にして、環境・貧困・平和・医療・教育など様々なテーマで開発教育協会（DEAR）等が作成したワークショップや教材にアレンジを加え実施している授業について報告する。2016年度9月より、高校2年理系の「コミュニケーション英語II」（教科書は桐原書店*WORLD TREK English Communication II*、副教材としてアルク出版『アクティブ・リーディングBasic』）を使用）の授業で実施している。各クラスの人数は26名。クラスによって詳細は異なるが、大まかな授業の構成および活動について述べる。その効果や課題、今後の展望についても概観していく。

開発教育への関心は1960年代の南北問題から始まり、1982年には開発教育協議会は発足した。南北問題・環境・紛争・貧困など地球上で起こっている諸問題は、もはや我々と無関係とは言えなくなってきた。これらの諸問題は、日本の社会のあり方や我々のライフスタイルに深く関係している。そのような中で我々一人

ひとりが、このような問題を知り、感じ、そして自分自身の問題として考え、その解決に取り組んでいくのが開発教育である。小貫仁（2004）によると、開発教育では、それらの問題と自分とのつながりを考えながら、一人ひとりが参加し、協力して行動する態度を促すことを目的とする（8）。これは従来の教師中心の指導では難しいが、最近では学習者が主体となる参加型学習が導入され、教師はファシリテーターの役目を担っている。参加型学習の中で学習者が様々なアクティビティを体験し問題に自らで気づき、それを深めていく。

開発教育協会によると開発教育とは「私たちひとりひとりが、開発をめぐるさまざまな問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることでできる公正な地球社会づくりに参加することをねらいとする」とある。このことを実現するために、ロールプレイやシミュレーション、ディベート、インタビュー、プレゼンテーションなどの参加型のアクティビティが行われている。

### 3. 英語教育に求めるもの

日本で英語を学ぶ目的は何であろうか。趣味か実用か、授業であるから仕方ないという意見もあるだろう。国内での英語の必要性についていえば、日本に置いて安定した職に就いたり、日常生活を送ったりする上で必ずしも英語を使える必要はない。以前授業中に「もし、英語が話せたら？」という仮定法の文章を作らせたことがある。回答には次のようなものがあった。

- 「ハワイに遊びに行く」
- 「世界中を旅して、おいしいものを食べる」
- 「ゴールドコーストでサーフショップを経営する」
- 「アメリカ人の美女と結婚する」
- 「DVDを字幕なしで見たい」

このような回答から、英語が話せるようになりたい目的が必ずしも実用という訳ではないことが見えてくる。たしかに将来の職業選択のために英語を使うことが必要だと思っている生徒もいくらかはいるだろうが、多くの生徒は、試験があるから、受験があるから、という差し迫った動機から英語を勉強している。

このような現状の中で、英語教育には何が求められているのであろうか。国際理解や異文化理解などグローバル化が進む現代社会において英語教育に求められているものは、英語の技術習得だけではないのは明白である。真の国際人として世界の状況について英語圏あるいは先進諸国の見解を学習するだけでなく、発展途上国にも目を向け、世界の状況を知り、多様な角度から公平に考察し、それに対して自分なりの意見を持ち、行動することができる人材を育てることが英語教育に求められているのではないだろうか。

### 4. 英語教育と開発教育

最初に英語教育の中に開発教育の考えや手法を取り入れたのは、Global Educationを進めるCates（2002）であると言われている。CatesによるとGlobal Educationは新しい語学教授法であり、世界の様々な問題（環境、貧困、多文化理解、平和、医療など）を解決するために参加型学習を通して知識、技能、態度を育成する。その活動の中で語学も習得させるというのがGlobal Educationの考え方である。最近の高等学校英語教科書ではアジアやアフリカなど発展途上国を題材とするものもある。しかしながら高校生にとって発展途上国での出来事は身近に感じるのが難しく、予備知識の乏しい学習者も多い。そのような中で開発教育のアクティビティは内容の導入、理解をスムーズに進め、自らの意見を持たすことが容易である。また参加型学習は外国語の教授法で効果的と言われているインタラクションを促進する。

### 5. 開発教育のアクティビティの実践事例

数多くある開発教育のアクティビティの中から、小川が授業中に実践し効果を実感できた例を三つ紹介する。

## 5-1 The Importance of Kenyan Tree Planting

ワンガリ・マータイ氏のケニアの植林活動を題材にした際に、発展途上国をより身近に感じてもらうためにシュミレーションゲーム「欲しいもの、必要なもの」を実施した。このゲームで生徒はBasic Human Needsとは何かに気づくことができた。“What do you need to live?”という問いかけに対して、生徒は10個の英単語を各自で考え、グループで話し合い、9個選びランキングをつける。グループ毎に英語で発表し、共通する回答がBasic Human Needsであることに気づいた。ここでBasic Human Needsが揃っている先進国と揃っていない発展途上国の話をして、発展途上国理解につなげた。生徒に考えさせることが重要であるため、あえて質問を受け付けなかった。その後はアフリカと日本のつながりを考えるためにワークショップ「私たちの生活とアフリカとの生活を考える」を実施した。伊勢エビやジャムといった我々に身近なものでもアフリカとの繋がりがあリ生徒は驚いていた。そしてこの題材の最後には“What will you do to protect the environment?”というタイトルで英作文を実施し<sup>(1)</sup>、グループで共有し問題を解決する方法を考えた。

生徒の感想として以下のようなものがあった。

- ・ アフリカには植民地、貧困や環境汚染などマイナスなイメージしかなかったけれど、日本の産業にとって欠かすことができないと強く感じました。アフリカについての知識が増えて良かったです。また友達と意見を共有することでたくさんの意見を出すことができました。(2年生女子)
- ・ 最近の授業で班活動はあまりないので良い機会だと思いました。他者の考えを知れ、意見を共有し合ったり、疑問に思う点について聞けたりすることはとても大切なことだと改めて感じさせられました。また今日の授業でダイヤモンドランキングの一番下にpeopleと書きましたが、この授業で大切だと実感させられました。(2年生女子)
- ・ 同じ地球上に存在する同じ人類でもこれほどの差があるというのはあつてはならないことだと感じた。日本政府としてもこのような国に対して何らかの支援を行っていると思うが、最終的には自国がどれほどこういった人たちに支援するための経済力を有しているかが鍵だと感じた。(2年生男子)

### 指導手順

#### 1 時間目

過程	学習活動・内容
導入 (20分)	1. 出席確認 2. シミュレーション 「欲しいもの、必要なもの」
展開 (35分)	3. アフリカを知る ・ PPを見てアフリカを知る。 4. アフリカを考える ・ ワークショップ「アフリカとのつながりを考える」 5. 新出語句の確認 6. Pre-reading
まとめ (5分)	7. Reading確認 ・ 本文を読み解答を確認する。

#### 2 時間目

過程	学習活動・内容
導入 (20分)	1. 出席確認 2. 前時の復習 ・ 新出語句の復習 ・ CDを聞く
展開 (35分)	3. Reading Questions ・ 本文を各自で黙読。 ・ ペアで確認する。 4. 音読 5. 要約 ・ 日本語で100字程度で要約する。 6. 課題提示 ・ 「環境を守るためにできること」 60~70words
まとめ (5分)	7. 次回予告 ・ ゴミ山で暮らす子どもの15分のスライドを見て感想を書く。

## 5-2 Children Living in Garbage

フィリピンのゴミ山で暮らす子どもたちを題材とした際にはゴミ山というものの自体が想像できなかったの

で、本文に入る前に、宇田有三の「ゴミ山に暮らす人びと」という15分のスライドショーを見せて、ゴミ山とはどういうものなのか、なぜゴミ山で暮らすのかなどを考えさせた。背景知識を持つことによって本文にスムーズに入ることができた。その後は「貧困を削減するために」というタイトルで英作文を書くために「貧困」についての理解を促す目的で、ワークショップ「貧困の輪」を実施した。ここでは貧困の現状と構造を理解した上で、その原因を考える。まずはインターネット検索で“Poverty”という語を中心に連想される事柄を英単語や英文で書き、グループで共有する。その後、英語で書かれた「貧困」の要素である8つのキーワードを各グループに配り、キーワードをつなげて「貧困の輪」を作らせた。そして貧困状態から抜け出すために断ち切らなければならない要素を1つ選び、理由を考えさせた。それをグループごとに英語で発表し、英作文の課題へと移っていった<sup>(2)</sup>。

生徒の感想として以下のようなものがあった。

- ・ 一面ゴミだらけで、その上で生活している私よりずっと小さい子供たちを見ると、自分の生き方はどれだけぜいたくだったのかと思い知らされました。男の子が「将来の夢は生きることです」と言っていました。この言葉を、今までに私たちはきっと一度も考えたことはないでしょう。生きていくのが当たり前だと思っている私たちにとってこの子の言葉はとても胸に突き刺さるものでした。このような人たちが少しでも減るように、私たちは貧しい人に目を向けなければならないと思いました。(2年生女子)
- ・ 文章の中で「自分たちが貧しいということを知らなかった」や「ゴミ拾いより良い仕事があることを知らなかった」という言葉があって自分たちが住んでいる地域の他の地域を知ることすらできない現実があったんだと衝撃を受けた。「同情ではなく、生きる知恵をください」という言葉を見た時に、「何かしてあげたい」と思いつつも、「かわいそう」「大変だな」と他人事で何もしてこなかった自分が浮かんで来て、自分の無力さを感じた。(2年生女子)
- ・ もっと文法を教えて欲しい。(2年生女子)

#### 指導手順

##### 1 時間目

過程	学習活動・内容
導入 (10分)	1. 出席確認 2. 前時の復習 英作文の発表
展開 (50分)	3. 新出語句 4. Pre-reading 5. ワークショップ ・ 『貧困の輪』
まとめ (5分)	6. 次回予告 ・ 課題提示

##### 2 時間目

過程	学習活動・内容
導入 (10分)	1. 出席確認 2. 前時の復習
展開 (40分)	3. Reading Questions ・ 本文を各自で黙読。 ・ ペアで確認する。 4. 音読 5. 要約 ・ 日本語で100字程度で要約する。 6. 英作文 ・ 「貧困を削減するために。」
まとめ (15分)	7. 次回予告 ・ 不発弾処理の動画

### 5-3 Child Soldiers

少年兵を題材とした際には、戦争や武器という馴染みのないことについての理解を深めるために、実際にラオスで撮影した不発弾処理の映像を視聴させた。そこで現在も残る戦争の負の遺産について説明した。その後導入として、少年兵の日常と自分たちの日常がいかに違うかを実感させるためにアルファベット表を作成させた。幼稚園児や小学生に英語を教えるならどのような単語を使うかを考えさせた。“apple”や“ant”など身近で容易な単語を使っている中で、アルファベット表<sup>(3)</sup>を配り比較させた。これはどのような子どもが書いたのかを考えさせた。「戦争中の子ども」などの意見が出たところで、ユネスコのDVD

『子どもと武力紛争』を流し少年兵の具体的なイメージをつかませ本文に入った。その後のアウトプット活動では“*If I were a child soldier, …*”と題してロールプレイを実施した。少年兵の立場になり武装グループから兵士になるように強要される場面や少年兵になった後など、グループでそれぞれの役割に分かれて、セリフを考えて、英文で書き、口頭練習の後にクラスの前で発表した。ロールプレイに慣れていない生徒も多いため、セリフをある程度こちらで指定し難易度を下げて活動しやすくした。同時に空所補充にすることによってある程度グループの独自性を出せるようにした。

生徒の感想として以下のようなものがあった。

- ・ 草がおいしげっていて、一目見ただけではどこに不発弾や地雷があるのかわからないような場所で生活しているなんて、今の私の生活からは全く想像できないし、かなり恐ろしいことだと思う。また、この動画では不発弾の処理をほぼ手で行っていたため、処理する人もかなりの恐怖の中で行っていたのではないかと思う。自分があの人たちでなくて良かったと他人事のように思ってしまった。(2年生女子)
- ・ 自分でセリフを考えるのは面白い。英語で話していると実感できる。(2年生男子)
- ・ 慣れない作業ばかりで戸惑った。(2年生女子)

**指導手順**

1 時間目

過程	学習活動・内容
導入 (10分)	1. 出席確認 2. 前時の復習
展開 (50分)	3. 導入 ・アルファベット表の作成 ・DVD (子ども兵士) 4. 新出語句 5. Pre-reading 6. 音読
まとめ (5分)	7. 次回予告 ・宿題の英作文提示

2 時間目

過程	学習活動・内容
導入 (10分)	1. 出席確認 2. 前時の復習
展開 (50分)	3. Reading Questions 4. 音読 5. 英作文の確認 ・グループでコメントを書きあう。 6. ロールプレイ ・If you were a child soldier
まとめ (5分)	7. 次回予告

**6. 教育効果と課題**

高等学校英語教科書には国際問題や発展途上国を扱う題材が収録されている。しかしながら単なる知識の注入で終わっていることも多いのが現状である。また遠い国の話として興味・関心を持ってない生徒も多いのが実情である。背景知識のない生徒が教科書の内容を的確に理解することは難しく、英語嫌いを助長することにもなりかねない。開発教育のアクティビティを通して背景知識を身につけることは教科書の理解を助けたと考えられる。これらのアクティビティは参加型の手法で「気づき」を大切にする。生徒たちは気づき、理解し、考え、自分なりに行動するということを促され、遠い国の話ではなく、自らのことに重ねて考えることができるようになった。教科書の内容を身近に感じ、授業への興味・関心が高まったであろう。

科目は「コミュニケーション英語Ⅱ」であり、英語の授業である以上英語の能力を身につけさせるということも当然必要になってくる。アクティビティは日本語で実施するものもあったが、少年兵のロールプレイや貧困を削減する方法のミニプレゼンテーション、これから実施予定のGlobal Issueについてのパワーポイントを用いたプレゼンテーションなど英語で活動する場面も多く設定しており、スピーキングの力もついたと考えられる。またアクティビティの振り返り作業では英語で書いたり、グループで共有したりという活動もあり、ライティングやリスニングの力も着実についている。少年兵のロールプレイは仮定法を用いるが、仮定法は苦手な生徒も多く、動詞の使い方など間違える生徒も多い。このような文法指導においては、最初に仮定法の例文を示し、できない生徒はパターンプラクティスの要領で単語を置きかえるだけでも完成できるように工夫する。そして教師がただ間違いを指摘するのではなく、グループで確認作業をしていくようにして

いる。お互いの文章を確認しあうことでより良い作品にしていくと同時に他人の間違ひを見つけることによって、自分の間違ひに気づく生徒も多い。また開発教育のアクティビティは一人で行う作業が少なく、グループでの実施、全体で発表などが多く、外国語教育で大切なインタラクションも増加したと考えられる。このように開発教育を英語教育に取り入れることによって、生徒の英語力の向上だけでなく、地球市民としての態度も育っていると考えられる。

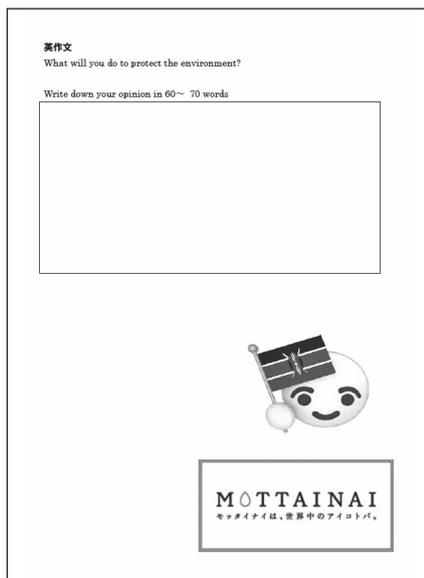
## おわりに

生徒の感想には「英語を話すのが楽しくなった」「友達と意見を共有することでたくさんの意見を出すことができた」、「途上国と日本のつながりの大切さに気づいた」「自分の中の当り前は、途上国では当たり前ではないことがわかった」「自分も国際協力に関わりたい」などの意見があった。外国語学習において語彙や文法を覚えるだけでは使えるようにはならない。アウトプットしてこそ外国語の習得につながる。そのアウトプットの機会をディベートやロールプレイ、シミュレーションなどのアクティビティでさらに与え、言語使用場面を授業の中で増やしていき、コミュニケーションツールとしての外国語習得につなげていきたい。そして英語で自分の意見や考えを発信できる生徒に育ってほしい。現在FacebookなどのSNSも発達しており、世界中に発信することが容易になった時代である。だからこそ自分の意見や考えを英語で発信し、世界中で活発に議論や意見交換ができる人材の育成こそ我々英語の教員の責務なのではないかと考える。

可能であれば国際協力出前講座等を利用し、国際協力の世界を感じとったり、国際協力の仕事を紹介したり、将来の進路選択の一つとなるようなキャリア形成にもつなげていきたい。最終的には授業の中で実施する開発教育のアクティビティを生徒たちに考えさせて、生徒の進行で実施していきたい。自ら考え行動する地球市民を育てるためにも授業を上記のように可能な限り能動的にして活発に学ぶことができる授業環境を作っていきたい。

## 注釈

- (1) 授業で使ったプリントと生徒の英作文例（下線部は重要な動詞語法や文法ミスの修正箇所）を書き出しておく。



I think we should be conscious of the environment all over the world. Japan especially wastes a lot of foods. Almost all developing countries suffer from lack of food, water, and so on. Japan is wealthier than developing countries. So we must thank we can do something that we want to. Therefore, advanced countries like Japan should save something.

(コメント：動詞の用法などに若干のミスがあるが、積極的に発信しようとする姿勢は評価すべきであろう。小川も指摘するように、教師による間違ひ指摘よりも、生徒同士でお互いの英文を確認しあう方が自らの文

法知識を再活性化することになり、文法学習の効果は高まるだろう。)

(2) 授業で使ったプリントと生徒の英作文例 (下線部は重要な動詞語法や文法ミスの修正箇所) を書き出しておく。

英作文  
What will you do to realize poverty reduction?

Write down your opinion in 60 ~ 70 words.

日本がゴミを「輸出」している??

マニラのゴミ問題は、フィリピンのゴミ処理システムがしっかりしていないから起きて  
いる…。そう人ごとのように思う人も多いのではないのでしょうか。実はここバ  
ヤタスに集まるゴミの中には、日本の医療廃棄物なども含まれるといいます。私たち  
知らない間に自分の国で処理できない廃棄物を他国に押し付けているのです。それでも、  
人ごとだと思うことはできるでしょうか?

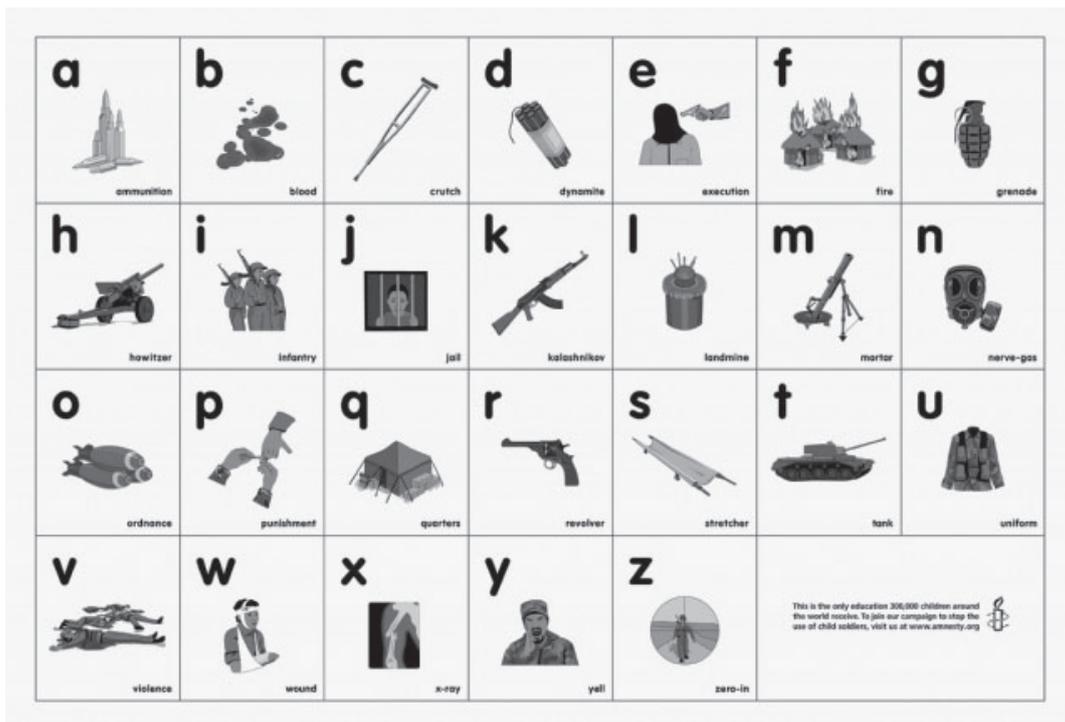
用語解説  
スカベンジャー・・・ゴミを拾って生計を立てる人たち  
ダンプサイト・・・ゴミ山



We should raise funds on the street. Some money of ours will be able to save a lot of lives. Also we must reduce the waste. For example, when we go shopping, we should use an eco shopping bag. And we must not buy unnecessary things, because they will be thrown away by us, even if they are still usable. So I think I can realize poverty reduction.

(コメント：動詞や数量詞の用法などに若干のミスがあるが、自分の意見にfor exampleなどを使って例を挙げ論証するという英文の構成が意識できている。小川の言う「自分の意見や考えを英語で発信し、世界中で活発に議論や意見交換ができる人材の育成こそ我々英語の教員の責務」の一つの成果と言えよう。)

(3) アルファベット表は、Creative Advertisements for NGO (www.ads-ngo.com/tagalphabet/2016/09/27) からのものを利用した。



## 参考文献

- Cates, K. A. (2002) : “Teaching for a better world: Global issues and language education” *Human Rights Education in Asian Schools*, 5, 41-52.
- 大川光基 (2016) : 「高等学校検定英語教科書が扱う文化題材の考察—異文化理解の観点から—」 *The Language Teacher*, 40.1, 3-8. ([http://jalt-publications.org/tlt/issues/2016-01\\_40.1](http://jalt-publications.org/tlt/issues/2016-01_40.1) Accessed December 8, 2016)
- 小川弘敏・中本智・松谷緑 (2014) : 「英語を学ぶことと教育を通じた国際協力のあり方」 『山口大学教育学部研究論叢』第64巻, 第1部, 173-180.
- オードリー・オスラー編 (2002) : 「開発教育と外国語教育」 『世界の開発教育』, 明石書店.
- 開発教育協会 (2013) : 『開発教育実践ハンドブック』, 開発教育協会.
- 開発教育推進セミナー編 (2001) : 『新しい開発教育のすすめ方-地球市民を育てる現場から』, 古今書院.
- 小貫仁 (2004) : 「何を学ぶの?」 『開発教育ってなあに?』, 開発教育協会.
- 近藤牧子他 (2016) : 『豊かさと開発』, 開発教育協会.
- 田中治彦他 (2006) : 『「援助」する前に考えよう』, 開発教育協会.
- 東京都教育委員会 (2015) : 『平成28年度使用都立高等学校 (都立中等教育学校の後期課程及び都立特別支援学校の高等部を含む。) 用教科書の採択結果について』  
(<http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2015/08/20p8r300.htm> Accessed December 8, 2016)
- 三浦孝他 (2002) : 『だから英語は教育なんだ 心を育てる英語授業のアプローチ』, 研究社.